

● 温江の
妙見堂

堂には文化3年(1806)5月(旧暦)に奉納された俳額が残っています。

俳額とは寺社に祈願のために俳諧(連句)や発句(俳句)を記して奉納した額のことです。

冒頭に「奉納四季発句合」と題して、後野、加悦、加悦奥算所、香河、温江の俳人23名、京都の俳人2名の手による四季折々の俳句が1人1句ずつ書かれています。時季の俳句を以下に抜粋してみます。

年晴の水ややすみてかきつばた
それなりに闇に入りけり雲の峰

山法師ぞしらぬ免なり閑古鳥
青匍

山法師の句には居住地の記載がありません。ただ、俳額の末尾には「文化三丙寅仲夏



俳額「奉納四季発句合」(温江 妙見堂)

当村願主」として青匍の名が再び見られることから、この人物が俳額奉納の発起人で、温江村の住人であると思われる。また青匍の句の後には「このもよふしの折からふみに聞ゆ」の前書きに続けて、

鳥も啼水も添れて若葉哉
京 定雅

とあり、京都の俳人西村定雅(1744-1826)の名が見られます。

定雅は与謝蕪村の門人たちと京都で交流した人でもありました。ここに書かれた句は全て定雅の選によるものです。

丹後に残る俳額の多くは薄板の筆記面と四辺の枠材とで構成されますが、この俳額はケヤキの一枚板に飾り切りを施した、非常に重厚な作りとなっています。当地の俳額研究は小室洗心の『丹後俳額集』(1932)で広範になさ

与

謝野町男山の集落を南に見下ろす高台に築かれた板列八幡神社は、中世の石清水八幡宮の所領の荘園として治められた経緯から八幡宮がこの地に建てられたことがはじまりと考えられます。現在の神明造りの社殿は、江戸時代、天保五年（1834）に再建されたもので、幣殿と拝殿が設けられています。

そして、拝殿入口の両脇には、一風変わった容姿の狛犬2体が鎮座して社殿を守っています。後足を曲げて腰を下ろし、前足を真つ直ぐに伸ばして頭を上げ



板列八幡神社石造狛犬
左/吽形像狛犬 右/阿形像狛犬

て対座する狛犬の像は、高さが約46cmと、普段私たちがよく目にする神社の狛犬と比べて随分と小さく見えます。しかしそれ以上に見る者の目を引くのは、そのずんぐりとした容姿ととても愛嬌のある表情にあります。

社殿を正面に見て右に鎮座するのが阿形の表情を浮かべる狛犬で、左に鎮座するのが吽形の狛犬です。阿形の狛犬は扁平な形の頭に大きく口を広げ、口角がやや吊り上がって笑みを浮かべているようにも見えます。吽形の狛犬は歯を剥き出しにして威嚇する表情が、豪快に笑っているようにも感じ取られます。

2体の狛犬は、いつ頃作られたものか不明ですが、丹後地方において石の狛犬が奉納された時期や、その類例から判断して室町時代から江戸時代前期の間に作られた狛犬であろうと考えられます。また、像の大きさから判断すると、本来は社殿内部に安置されていた可能性もあります。

鎮守の森にひっそりとたたずむ2体の狛犬は、地元の信仰を集める八幡神を風雪に耐えて今も守り続けています。

与謝野町教育委員会

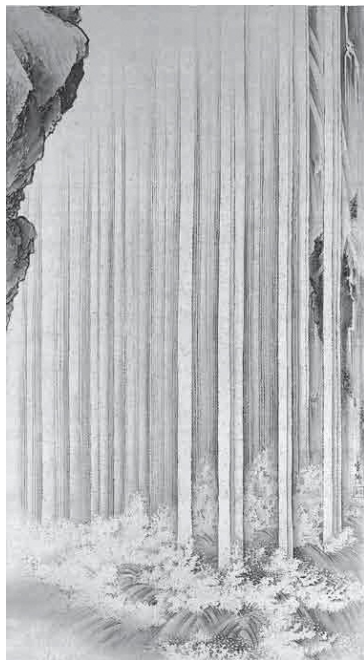
現

在、江山文庫では、11月11日まで、秋季特別展「さまざまな、龍」を開催しています。

特別展では、「龍」にまつわる絵画を展示する中、龍本体は描かれていないものの、今にも龍が現れそうな大きな滝の絵画が展示されています。岩屋村出身の画家、田中雪溪の「大瀑布図」です。

雪溪は、天保2年（1832）に岩屋村で生まれました。和田屏山に師事し、のち岸竹堂の門人となります。

大和絵を得意とし、明治時代の前中期に活躍しました。地元にもいくつかの作品を残し、大正2年9月2日に郷里で没します。



「大瀑布図」(町指定文化財)

- 文化財の種類 絵画
- 絹本墨画（一部着色）一幅
- 掛軸 151.8 × 85.6 「雪溪」
- 朱文方印「雪溪」
- 管理者 雲岩寺
- 時代 明治時代
- 指定 平成8年6月23日

「大瀑布図」は、地元で保管されてきた作品で、文字通り画面全体に大瀑布が描かれています。画面端に少し岩がのぞいている他はすべて滝が描かれており、水が落ちる直線的な流れと滝壺へ落ちた後の水しぶきの様子が、迫力ある構図で画面いっぱい表現され、まさに響きわたる滝の音が聞こえてくるようです。

ぜひこの機会に、江山文庫で「大瀑布図」をご覧ください。

古代丹後王の輝き

平成10年夏、阿蘇海を見下ろす大風呂南1号墳第1埋葬部から「透青色の瑠璃（ガラスのこと）の腕輪」が発見され、1800年前の古代丹後王の輝きとして話題になりました。

国内で発見されたガラス釧（腕輪のこと）は、4遺跡、8個分（本品含む）ありますが、多くは長い間地中に埋まっていたため、表面が白色に風化して当時の輝きを失っています。それに比べ、大風呂南1号墓品は、当時の姿そのままではないかと思われるほど美しい状態で発見され、まさに丹後の至宝と呼ぶに相応しい品です。また、他品が



青く美しい、古代の輝きを放つガラス釧

緑色であるのに対して、本品のみ青色であることも特徴です。

本品は中国大陸からの輸入品と推定されており、古代丹後王の広範な活動を物語る品として、美術工芸品としてだけでなく、歴史資料としても貴重なものです。

腕輪か、胸・腰飾りか

大きさは外径9・7cm、内径5・8cm、重さ168gで、手に持つことやズッシリとした量感があります。

「腕輪」とされていますが、その実態は定かではありません。腕輪だとしたら、内径5・8cmは、男性が手を通すには難しい大きさで、女性のものであったかもしれません。しかし、当時の丹後人が腕輪を着けた習俗を示す証拠はなく、あるいは、古代中国の習俗であった「佩玉」（腰におびる宝飾品）のように、ひもで結って胸・腰飾りとしたのかもありません。

透青色の瑠璃の宝飾品をまとった古代丹後王は、どのような姿であったのでしょうか。

与謝野町教育委員会

与

謝の下宮神社
には文化七年

(1810)秋に奉納された俳額が残っています。

俳額とは寺社に祈願のために俳諧(連句)や発句(俳句)を記して奉納した額のことです。

冒頭に「奉納発句合」の題字、続いて「題 混雑」として、四季折々の俳句が38句書かれています。1人1句で、選

者をつとめた京都の

俳人西村定雅(1744)

1826)による末尾句を除き、加悦6名、加悦奥8名、岩屋3名、三河内2名、後野2名、与謝16名と、37名の地元俳人が名を連ねています。それぞれの居住地は作者名の右肩に書かれています。そのうち2句は地名に続けて「少年」と書かれています。

二親をならべて月を見る夜かな

岩屋少年

忠蔵

しら菊は秋に染るも見事なり

与謝少年

兵吉



俳額「奉納発句合」(与謝 下宮神社)

作者が何歳までの場合に「少年」と付記していたのかは明らかではありませんが、おそらく10代を超えない子どもが作った俳句なのでしょう。

いずれの句も少年らしい素直な句調の中に、両親とともに過ごす幸せや、移ろいゆく季節が見せる美しさへの感嘆が詠み込まれています。

他の作者名は俳号のようですが、「忠蔵」「兵吉」は本名と思われます。その名を付けた親や祖父母に連れられ、あるいは単独で、約200年前の少年俳人たちは句会に参加し、大人たちと俳句の力を競い合っていたのでしょうか。

与謝野町では現在も子どもたちによる俳句作りが盛んですが、その血脈を示すかのようなかの俳額は、1月22日から開催の江山文庫企画展「俳額と句碑」で見ることが出来ます。

岩

屋区、雲岩公園にある天王堂には5体の仏像が安置されています。今回は、その中の2体、木造二天部形立像の伝持国天立像と伝増長天立像をご紹介します。

この2体の仏像は、両者とも仏の世界を守る守護神(四天王)と言われており、邪鬼を踏みつけた様相をしています。それぞれ高く挙げられた手には、伝持国天は独鈷杵(煩惱を打ち砕く法具)、伝増長天は剣を持ち、腰に手をあてた姿で、左右対称で須弥壇(仏像等を安置するために一段高く設けられた場所)に安

置されています。2体の前中央に安置されている木造毘沙門天立像(「広報よさの」平成20年10月号「時の贈り物」掲載)とともに、昭和62年10月12日に町指定文化財に指定されています。

2体の仏像は、頭部や両腕などが近代の修理によって新しいものになっっているものの、像の内部に内刳り(像の内部をくり抜くこと)のない一木造り(一つの材から作る木彫像)であることや、上半身を細身に表し下半身に量感を持たせている点などから、平安時代に造られた可能性があります。



伝持国天立像(左)と伝増長天立像(右)

700年以上の歴史に刻まれた雲岩寺の栄枯盛衰を見守り続けてきたことでしょう。4月14日には、雲岩公園つじ祭にて特別公開が予定されています。ぜひその姿をご覧ください。

歴

史文化を知る資料には古文書や遺跡など

さまざまなものがあります

が、各区に伝わる江戸時代の

村絵図や明治から昭和時代の

地籍図など「地図系資料」も

地域の移り変りを知りうる資

料的価値があります。地図系

資料からは、直接的には「土

地利用の変遷」を読み取り、

さらにその背後にある事象を

推測したり、その後の変遷を

跡付けたります。

さて、三河内区には、個人

から寄贈を受けた「三河内村

地図」と裏書きされた地籍図

があります。明治時代の「地

おしちょうさこうせい
押調査更正地図」と分類さ

れるもので、制作年は推測に

なりますが、周辺地域の状況

や関係者の話からすると、原

図は明治19年（1886）制

作の可能性が高いと思われま

す。また、寸法が縦108cm

×横76cmで、このタイプの地

籍図としては小さく、紙質な

どからみて、原図を2分の1

サイズで複製した地図の可能

性もあります。

三河内は、大正6年（19

17）5月の大火災や昭和2

年（1927）3月の大地震

で多くの文書が失われたと思

われる中で、この地図は大変

貴重です。この地図から読み

取れることとして、例えば、

道路状況からは、三河内祭の

屋台巡行路の変遷過程を裏付

けることもできるなど、それ

ぞれの視点によってさまざま

な地域史を語ってくれます。

与謝野町教育委員会



三河内区に伝わる旧三河内村の地籍図。
大地震や大火災を逃れて残存する貴重な歴史資料
です

与

謝野町が誇るつつじと奇岩の名所、岩屋

雲岩公園の稲荷堂には、甫尺という江戸時代の宮津俳人の俳句を刻んだ句碑が残っています。

岩むろに一夜籠らむ霜の声

甫尺

季語は「霜の声」で冬。しんしんと冷え込む夜半、霜が降りる気配を音がするように感じたものです。

筆跡の元となった自筆の屏風の記述によれば、甫尺の母親は岩屋村の出身で、亡母の供養をかねて雲岩庵に法華經一部八巻を奉納し、門人や俳友ら16人とともに百韻を連ねたということです。(百韻Ⅱ五七五の長句と七七の短句を交互に連ねて百句に至る連歌



甫尺句碑(昭和初年の建立)

や俳諧の形式のこと)

文中では頂上の雲岩の窪地に安置された元禄13年作の弥勒菩薩坐像について触れており、続けて冒頭の句が記されていることから、「岩むろ(室に一夜籠らむ)」とは、山上で句作に耽る自分たちの姿を、岩の中の弥勒菩薩になぞらえたものではないでしょうか。

【甫尺】(生年不明、1804) 宮津に生まれ同地の紺屋の下絵職人となつたのち京都に出て、与謝蕪村と交流のあつた俳人三浦梧良に俳諧を学びました。俳句だけでなく絵画にもすぐれ、蕪村の影響を思わせる俳画を多く残したことから「丹後蕪村」とも呼ばれました。前述の屏風にも百韻興業の様子が描かれています。

句碑は昭和初年に岩屋西林寺の住職が屏風中の甫尺の句の写真を引き伸ばして刻んだもので、稲荷堂の縁板を切り欠き、堂に一体化したような形で設置されています。

甫尺の俳画作品は、9月から江山文庫の秋季特別展でご覧いただけます。

与謝野町教育委員会

江 戸時代の宮津の俳人、
甫尺（生年不明、
1804）は母親が岩屋の出

身で、雲岩公園に句碑が残る
など、与謝野町にもゆかりの
ある人物です。

甫尺は俳句だけでなく、与
謝蕪村の影響を思わせる俳画
を多く残したことから「丹後
蕪村」と呼ばれました。

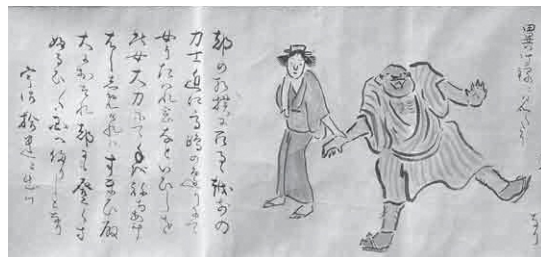
かつて与謝野町内に伝わっ
ていた、甫尺の絵巻物を一点
ご紹介します。

「諸処説話絵巻」

全長7メートルを超すこの
巻物には、仏教説話や地域伝
承など、さまざまな説話を文



「賢老褒美図」
「諸処説話絵巻」より抜粋



「力士返討図」
「諸処説話絵巻」より抜粋

章と俳画調の彩色画で描か
れ、12篇の説話がひとつの巻
物に貼り交ぜられています。

「賢老褒美図」は長生きの

人に酒や米などの褒美を与え
る様子。2枚目の「力士返

討図」は旅の途中で女性に
ちよつかいを出した力士が逆
に怪力の女性から腕をねじり
あげられてしまう様子です。
それぞれ少ない線で人々の仕
草を愉快に表現しています。

本作をはじめ甫尺の作品
は、江山文庫秋季特別展「甫
尺と丹後蕪村とよばれて」
で11月10日までご覧いただけ
ます。

（与謝野町教育委員会）

今

回は、下山田区にある明境神社の末社稲荷社に安置されていた、木造阿弥陀如来坐像を紹介します。

この像は、座禅のように結跏趺座の姿勢でお腹の前で印を結んでいる、よく見かける阿弥陀如来像です。

張りがあり、理知的で厳しい顔の表情や衣のひだの穏やかなラインなど、鎌倉時代後期の特色がよくうかがわれることから、昭和62年10月に町指定文化財として指定されました。

高さが50cmに満たない小さな像ですが実物をみると、どっしりとした構えに圧倒され、堂々とした迫力さえ感じさせます。

明境神社の近隣には、菩提寺という寺院があったと

いう伝承があります。この寺院の詳細については、ほとんどわかっていませんが、隣接する下山田愛染堂に残る石造物や仁和寺に保管されている菩提寺の梵鐘に線刻された銘文などから、菩提寺の存在を垣間見ることができそうです。

伝承によると室町時代に栄えた寺と言われていますが、この仏像が作られた鎌倉時代後期にも菩提寺があった可能性も考えられることから、本像と菩提寺との関連付けることも否定できません。

本像は、もともと明境神社の末社稲荷社に安置されていたのですが、現在は京都府立丹後郷土資料館で常設展示されていますので、ぜひご覧ください。



木造阿弥陀如来坐像
文化財の種類／彫刻（町指定文化財）
管理者／明境神社
時代／鎌倉時代後期